

中国語の受動態 (續)

エヌ・ヴェ・ソーンツェワ著

川上久寿訳

目次

はしがき	1
「主語—被—(補語)—述語」公式による動詞文での「被」	10
動詞の述語	10
動作の主体を意味する名詞 (以上 34 輯)	40
動作の客体を意味する名詞	45
主語のために客体の意味を確実にするはたらきをする「被」と その動詞との結合	54
「被」を前置詞とみなしうるか	57
「被」を動詞のプレクティクスとみなしうるか	59
「被」を分析的形態の成分とみなしうるか	69
「被」を黏着のアフィクスとみなしうるか	73
非限定主語をともなう文における「被」	77
主題文における「被」	86
むすび	89

動作の客体を意味する名詞

三項の文

これまで三項の文を分析するにあたっては「主語—被—補語—述語」の公式として研究してきた。たとえば、她写给她姑母的信是被大衆都看了 (丁玲選集, 12) 客体の名詞「信」は主語, 主体の名詞「大衆」は補語とみなしてきたが, この分析は正しいだろうか。

周知のように「主語—述語—補語」の型の文の主語決定規準として, 通

常は主語が述語の前にあると考えられた。しかし、こういう規準がまったく正しいとはいえない。

中国語の能動態動詞文における主語決定の規準は、なによりも主動者（動作の主体）と、その述語との関係による直接の位置（他動詞のときは前、自動詞のときは前または後）との相互関係を考えねばならない。⁽⁵⁹⁾

動詞の前あるいは動詞の後にある名詞と動詞との結合は、主語と述語との結合のように補助詞なしでできる。もし主語と述語の間に名詞がはさまるとすれば、その前には必ず補助詞があり、これがあるため、その後におかれる名詞は主語となれない。主語と述語の間の直接の結合は、たとえその間に新しい名詞を導き入れるにしても補助詞によって保たれる。たとえば、

我和他説話（このばあい「和」という前置詞が「他」の前にあり、主語と述語の間にはさまっている）

我用石头盖房子（「用」という補助詞は「石头」という名詞の前にある）

我給他买了（名詞「他」の前に前置詞「給」がある）

これらの文では主語と述語の間に各種の補語が補助詞のたすけをかりて挿入されているにもかかわらず、主語と述語は直接むすびついている（このばあいは動作の主体と動作との結合）。

受動態文では述語の前におかれた動作の主体たる名詞の前に「被」がくる。これは動作の主体たる名詞が主語ではなく、動作の客体たる他の名詞が主語だということである。

「被」を文中に入れても主語と述語の直接の結合は妨げられない。しかし同じところへおかれる他のすべての補助詞とちがって、「被」がつくと本質的に主語の内容がかわる。このばあい「被」は動作の客体と関連し、主動者（動作の主体）とは関わりがない。⁽⁶⁰⁾

(59) 詳細はエヌ・ヴェ・ソーンツェワ、中国語動詞文における主語決定の規準、31頁をみよ。

(60) したがって、この種の文では主語の規準のひとつが変わる。つまり主語は動作の主動者と関連しなくて動作の客体に関連する（主語と述語の直接的結合の規準は保たれている）。

したがって三項の受動態文を分析すれば「主語—被—補語—述語」という公式にならねばならない。

主語と述語の間に各種の補助詞が入る能動態の三項文とくらべると、「被」はこれらの補助詞とおなじく、その後におかれる名詞によって条件づけられるということを見とめねばならない。しかし「被」はそれらの補助詞と異なり、主語となる名詞とむすびつく⁽⁶¹⁾、なぜなら「被」のついたとき主語の内容がかわるからである。動作の主体たる名詞がない二項の受動態文があるということは、なによりも「被」が主語となる客体の名詞と結合することをしめしている。

二項の文

呂叔湘・朱德熙の「語法修辞講話」には、「被」のつく文を使用するには制限のあることを述べているが、それと同時に最近ではかなり自由に用いられるようになったともいっている。著者は多くの例をあげて、「被」がなんの根拠もなく用いられており、とり去って差支えないという意見を述べ、とくに二項の文では「被」をおくことに反対している。たとえば、

碗打破了

信写好了

しかし、その他の多くの二項の文では「被」は必要だとしている。

儿童們被組織起来了

当他达到美国海岸时，被拒絕登陆

著者はこのふたつの文に「被」をおく必要がないとし、これがないと文の意味が反対になって、主語の客体が動作の主体になる（「被」がないと能動態になる）といっている。

(61) 能動態文では「被+名詞(述語の前にある)」という結合は状語とみなされることもある。しかし「被」が主語と結合していることはそういう解釈の根拠にはならない。

(62) 呂叔湘, 朱德熙, 語法修辞講話, 117-121頁。

文裕の「被について」には同じ考えがある。⁽⁶³⁾ 以上の人々の意見によると「被」が不要か、あるいは普通はおかれることのない二項の文において動作の客体となる名詞は非活動体である。「被」のつく文では客体の名詞は必ず活動体である。こうして「被」は活動体名詞のばあいには要ることになる。なぜならそれには主体と客体の二つの意味があるためである。⁽⁶⁴⁾ 非活動体名詞のときには「被」がない、というのは、それには客体以外の意味がないからである。

活動体名詞が主語となる二項の文をしらべてみよう。

他被感动了 (巴金, 家, 50)

几个有名的医生被请来了 (巴金; 家, 288)

鸣风被唤到太太底面前 (巴金, 家, 199)

これらの文で主語になっている単語は動詞の動作の客体である。これら主語になっている単語を動詞の動作の主体とするには「被」をとり去れば充分である。実際、あるばあいに (たとえば状態文 (訳注: 動詞が他動詞で動作の主動者が欠けている文, たとえば这ヶ飯不能吃) で) これらの単語は客体的意味をもてるが、「被」によってのみ主語の一定の意味 (客体的意味) はつよく、固定したものとなる。もしも「被」がなくて主語における主体と客体的意味が語法的に対比されずコンテクストでわかるものとするれば、「被」はこの対比を明らかにする。

「被」はその存在によって主語となる名詞あるいは代名詞が、動きをもつ動作の主体として動詞と関連するのではなく、動きをもつ動作の客体として関連し (あるいはそれを固定化) する (名詞あるいは代名詞のため語法的に客体的意味を確実にするものとなって)。

以上によって、活動体名詞のある文では「被」を必ず用いねばならないことがわかる。しかし非活動体名詞があり、それが主語のはたらきをしてい

(63) 語文学習, 1951, 第2号。

(64) ア・ア・シャフマトフ, ロンヤ語統辭論から, —— 《現代ロンヤ語にかんするシャフマトフの論文から》, モスクワ, 1952, 95頁。

る文に「被」のあることはどう説明したらよいのか。この型の文は現代中国語では非常に広く用いられている。たとえば、

粉紅色的云片被冲开了 (霧雨電, 12)

他底幻夢被打破了 (巴金, 家, 27)

他們底祕密依旧被保守着 (巴金, 家, 4)

老媽媽的腿也被炸断 (魏魏, 78)

上にあげた例では非活動体名詞が主語となっており、それは後につづく動詞の動作の客体になれるだけである。これらの文で名詞が動詞の客体としてむすびついていることは、「被」がなくても明らかである。したがってこれらの文では名詞が動作の客体であることを示すため「被」が必須であるとは思われない。

このような文章に「被」を用いるのは、非活動体名詞が主語となりながら「被」のない二項の文型が、現代中国語には他にもあることからいよいよもって理解しにくい。

我們底事情决定了 (巴金, 家, 251)

兩頁紙已經寫完了 (巴金, 家, 194)

茶碗摆齐了 (巴金, 家, 124)

これらの文の動詞は他動詞で、その前にある名詞はその動詞の動作の客体である。

この種の文は常に中国語学者の注意をひいてきた。

多くの研究者はこの文を意味上の受身 (понятийный пассив) とみなしている。⁽⁶⁵⁾ 「被」をともなう二項の文と、意味上受身の二項の文を比較して、学者は「被」使用の任意性の結論に達している。

(65) 王力, 中国語法理論; イ・エム・アジャーニン, 中国語動詞の意味範疇, モスクワ, 1945, No. 1, 44 頁; エヌ・エヌ・カロートコフ, 中国語における文の発展段階性と動詞区分の方法, 博士候補論文 (タイプライター), モスクワ, 1946, 15 頁; エヌ・エヌ・カロートコフ, 歴史的シンタックス (タイプライター), モスクワ, 1947, 317 頁。

われわれは上述の二項の文を特殊な動詞文の型たる状態文に関連づけよ⁽⁶⁶⁾う。ふつうはその主語になっているのは非活動体名詞である。活動体名詞が主語として用いられることはめったにない。たとえば、

土匪消灭了

我曾經有一ヶ小兄弟是三岁上死的就葬在这乡下（魯迅，23）

これらの文で活動体名詞は動作の客体も主体も意味する。

このような例は少ない、非活動体が主語になっている状態文が依然として大多数である。しかしこれら個々の例は、まさに次のこと、つまり一般的にいてこれらの文の主語にとっては、それが活動体か非活動体か、それが後につづく他動詞の動作の主体か客体かは意味をもたないということを証明している。

それは状態文というものが主語をしめす物の状態表現を特徴づける文である以上自明のことである。状態文は動作の主体も容体も主語になれる繫詞文を思わせる。

「被」をともなる二項の文についていえば、主語の容体的性質は語法的に明らかであり、「被」により形態化されている。ここに「被」をともなる文と状態文との主な違いがある。

したがって「被」をともなる二項の文で、非活動体名詞が主語になっているとき、「被」は主語の容体的意味を語法的に確実にするものとみなすことができる。

二つの文型間の基本的差異と、それにまた相異なる二つの文型があるということ、それ自体が（そのうちのひとつには「被」が用いられる）「被」の任意性という問題をとり除くことは疑いがない。

上述のように中国の学者には、主語となる非活動体名詞のある二項の文に「被」をおくことに反対するものもいる。その意見によると、「被」は最

(66) この文をくわしくしらべるにはエヌ・ヴェ・ソーンツェワの「中国語における動詞文の主語規定の規準」を見よ。

初「遭受」の意味だから常に「不愉快」な色彩がある。非活動体には不愉快のあるわけがないから、非活動体名詞が主語となっている文で「被」は用いられない。

王力教授はこの考えを再三述べている。⁽⁶⁷⁾

しかし「被」の使用につき、このような解釈を下すことには一再ならず批判がむけられている。⁽⁶⁸⁾

「被」にはどうしても「不愉快」の観念がつきまどっているということになると、非活動体名詞は三項の文でも用いられないだろう。しかしながら、こういう例がひろくみられることは「不愉快論」者さえみとめているのである。⁽⁶⁹⁾

「被」の使用はその語法化の道を規定した本来の意味によって説明されることは疑いない。

われわれの観点では、「被」の使用は「不愉快」の観念とむすびつけるべきではなく、主語として用いられている名詞の性質とむすびつけるべきものである。

古い文献をしらべるとしごく明らかであるが、中国語発展の全過程をとおして、「被」をともなり文では活動体名詞が主語として用いられてきたという特徴がある。⁽⁷⁰⁾

補助詞としての「被」が中国語に存在した第一期⁽⁷¹⁾（紀元前4世紀—二世紀）によって証明されるが、「被」は活動体名詞とだけしか用いられなかった。

(67) 王力, 中国語法理論, 176頁; 王力, 漢語史稿, 419-437。

(68) 劉世儒, 被動式的起源, 32頁。

(69) 碗被人打破 (呂叔湘, 朱德熙, 語法修辭講話, 117頁)。

(70) 王力教授, 呂叔湘, 朱德熙教授は主語にたいする関係からいって, 不利あるいは望ましくない行為があるばあいのみ受身は可能なりとして, 間接に「被」をともなり文における主語の特徴を指摘している (なぜならなんらかの不利あるいは望ましくないものを感じるのは活動体に限るからである)。

(71) 王力, 漢語史稿, 419-437頁。

多くのばあい活動体は人間であったが、いつもそうだったわけではない。

たとえば、国一日被攻…（戦国策）このばあい「国」は活動体である。なぜかというと後にくる動作との関係上、この言葉は主体あるいは客体を意味するふたつの面をもちうるからである。したがって、この例文には「被」⁽⁷²⁾をおける。

「被」が補助成分として存在した第二期（4—5世紀）、つまり「被」と動詞との間に動作の主体を意味する言葉が用いられはじめた時期も、また「被」をともなう文の主語になったのは活動体名詞だけだったことを証明している。たとえば「世説新語」には「被」をともなう文で、非活動体が主語になっているものはない。主語として用いられているのは、固有名詞、人称代名詞、あるいは人間をあらわす名詞（主語省略のとき、「被」とむすびついた動詞は活動体たる人間についてなされた動作を意味する）である。

非活動体が主語として用いられはじめたのは唐の時代（618—907）で、「被」をともなう文の発展の第三期にあたる。このばあい主語になる非活動体は、通常三項の文だけに用いられた。たとえば、

皮袋被賊盜去（朝野僉載）

これ以後の文献では非活動体が「被」をともなう文で主導的地位をしめている。

活動体あるいは非活動体が主語となりながら、「被」をともなう文を表にして次にかかげてみよう。

この表によって明らかなことは、「被」をともなう文では（基本的には三項の文）しばしば活動体を示す言葉が用いられていることである。

二項の文では非活動体を示す言葉はほとんど略され、現代語の二項の文

(72) 受身の文ではその他の補助詞とともに、ふつうは活動体名詞も用いられることは興味がある。たとえば当時のものとして補助詞の「見」「为」が用いられている次の例文を見よ。

妻子为戮（左傳，紀元前4世紀）；君子何知其将見死（孟子，紀元前4世紀）

テ キ ス ト	二 項 の 文		三 項 の 文		総 計
	活動体の 主 語	非活動体 の 主 語	活動体の 主 語	非活動体 の 主 語	
水 滸 傳	20	1	101	28	150
三 国 志 演 義	41	5	85	19	150
西 游 記	3	1	87	19	110
兒 女 英 雄 傳	2	—	34	19	55
紅 樓 夢	3	1	46	20	70
現 代 作 品	166	104	224	216	710

においてのみ主語として非活動体を示す言葉が広く用いられはじめています。

主語となっている名詞（活動体と非活動体）の性質によって受身の特徴を規定しようとする試みは各種の言語にかんする一連の研究にみられる。

たとえば、日本語では活動体を示す言葉が主語として用いられる特徴がある。

エヌ・イ・コンラッドは「中国語と日本語」で、「日本語で非活動体が主語になる受動態の述語構造がひろく発達した⁽⁷³⁾」のは、ごく最近のことであるといっている。

ロシア語では反対の現象がみられる。「非活動体は人間よりもずっと自由に受動態の主語として用いられる⁽⁷⁴⁾。」

ロシア語で受動態文に非活動体が多く用いられることは、再帰代名詞の«себя»から発生した«-ся»という態をしめす補助成分の本来の意味によって説明される。ロシア語では発展の論理が正反対である。活動体の単語をともなう«-ся»はなによりも動作の再帰性をもつだけに、活動体の単語が受動態文にあらわれるということは本性に合わない。それで非活動体の単語が、このばあいさらに重要な地位をしめることになる⁽⁷⁵⁾。

非活動体を主語とする「被」をともなう二項の文が数量的に増大したこ

(73) 「東洋学研究所学術論叢」, 第4巻, モスクワ, 1952, 20-21頁。

(74) 「ロシア語文法」, 第1巻, 416-417頁。

(75) ア・ア・シャフマートフ, ロシア語の統辞論から, 95頁。

とは、次のことを証明している。つまり中国語における受身の使用範囲がひろがったことで、それは部分的にはアナロジーの法則の影響をうけ、また部分的に（若干の中国の言語学者がこれをみとめている）受動態文の主語に非活動体の単語が非常にひろく用いられている外国語の翻訳の影響を受けているためである。

主語のために客体の意味を確実にするは
たらきをする「被」とその動詞との結合

すでにみたように「被」は主語の後にあって一種の客体の意味を確実にするものとなるが、このことは主語となる事物が客体とみなされることを前提とするもので、客体は動作があるばあいのみ存在できるし、またなんらかの動作に関連してのみ存在しうるものである。主語となっている事物のもつ客体の意味は、述語動詞にたいする関係にあらわれる。したがって主語に客体の意味のあることは、動詞の動作が主語に向っているということである。したがって「被」は主語のために、客体の意味を確実にする方法であると同時に、動詞の動作を規制整頓する方法でもある。

「被」によって動詞は主語となる名詞（動作の客体にも）に関係するし、また「被」の後におかれる（動作の主体）名詞（このばあいはそれが人称のとき）にも関係する。

動詞は「被」によって名詞と一定の関係に入る。したがって「被」は名詞にたいする動詞の語法関係の附加成分とみなしうる。

動詞と名詞とのシンタックス結合を示す「被」は、この点でロシア語の《-ся》に似ているというのは、これまた主体と客体を意味する名詞と動詞のシンタックス関係を規制しているからである。

「被」をともなう文に相応するものとしては、まるで反対の関係にある「被」なしの文がある。こういう対応は三項の文にも二項の文にもある。受動態文の補語は能動態文では主語となり、主語は補語となる。

ロシア語では動詞の語法関係の変形によって動詞自体の補足的な語法的意味の変形がおこる。この観点からすれば「被」は中国語の動詞の補足的な語法的意味の形式的しるしになるともいえる。したがって「被」を入れることにより（能動態を受動態にかえるばあい）単語間の関係は変わり、「被」自体は語法関係をしめすばかりでなく、この関係を変えるということが出来る。われわれは態の研究に用いられている「関係の⁽⁷⁶⁾変化」という術語を使うことにする。これは「被」が實際上、すでに変化した関係を固定させるだけであることを忘れずに「被」のこのはたらきを補足している。この点で「被」は類推的に動詞形式に用いられるとあってよい。この動詞形式は「動作の主⁽⁷⁷⁾動者と動作の客体間の関係を変えながら同時に態も表現している」。

しかし「動作の主体と客体間の関係が、すべて態の関係をもっているわけではない。動詞に語法形態があるものにか⁽⁷⁸⁾ぎる」。「被」は《-ся》のような語法形態の方法とみなしうるだろうか。

「被」は《-ся》のように語法的意味の形式的なしるしであるが、本質的には《-ся》とは異なる。《-ся》という助詞は多義的で、受動態と再帰・中性態の意味をあらわす方法となっている。したがって、よくあることだが、どんな意味と関係をもつかによって、主語となる名詞が客体か、それとも主体かを区別したり決定したりすることが非常にむずかしい。

《-ся》のついている動詞の受動の意味は、造格形式において主動者たる名詞があるばあいは、とくに明らかである。ア・エム・ペシコフスキイはこれに関連して述べている。「特別な態の意味はここでは動詞自身の形式（つまり《-ся》. 筆者）によるというよりは、むしろそれを含む単語の結合の形

(76) 態関係の分析には、この術語が用いられている。とくに動詞が各種の態形式をあらわす同一の動詞からできた一連の文を比較するときは、とりわけそうである。態の形式が単語間の語法関係を変えず、なおさら主体と客体の間の現実の関係を変えないことは明らかである。

(77) 「ロシア語文法」, 第一巻, 414頁。

(78) 同上。

式によるものである。すべては“主動者”の造格にある⁽⁷⁹⁾。

中国語の「被」も多義的であるが、主語との関係についてはそうでない。

「被」は客体が主語になること、つまり文中に受動の意味の存することをしごくはっきりと証明している。したがって受動態文に「主動者」が存することは、一般的にいえば必須ではない。しかし主動者があるばあいには「被」の助けをかりるが、このとき「被」は主体となる名詞との関係上、前置詞のはたらきをしているようにみえる。

たとえば、英語では客体の意味が動詞の特殊形式（助動詞+動詞の形動詞形式）によって主語自体を固定し、主体の意味が名詞の特殊な前置詞 by によって固定されるとすれば、中国語のばあいは「被」が英語の前置詞 by のはたらきも動詞の形式も兼ねているし、客体の名詞にも動作の主体の名詞にもつかえるという二重性がある。

再三指摘したように「被」の基本的はたらきは主語となる名詞、つまり客体との関係にあらわれている。

前置詞と体詞との結合にも似た「被」と動作の主体との結合は、一単位としても動詞の語法的意味の形式的しるしとしても、見られなかったことに注目せねばならない。これに関連して研究者は動詞の前の「被」と名詞の前におかれる「被」を区別して、前者は動詞の形態的しるしであり、後者は名詞のシンタクスの機能のしるしとみなしている。

したがって動詞の前の「被」はプレフィクス⁽⁸⁰⁾、あるいは補助詞とよばれ、⁽⁸¹⁾名詞の前におかれる「被」は前置詞⁽⁸²⁾といわれる。

動詞の前の「被」は最近ではますます受身（受動）⁽⁸³⁾の意味、あるいは受

(79) ア・エム・ペソコフスキイ、科学的に究明したロシア語統辞論、モスクワ、1986、118頁。

(80) 余健萍、詞頭“被”和詞尾“了”，中国語文，1956，第9号，30頁。

(81) 汉语，人民教育出版社，第三冊，北京，1956；章寿康，略論汉语構詞法，1-8頁。

(82) 黎錦熙，新著国語文法，44頁；王还，把字句和被字句，28頁。

(83) 章寿康，略論汉语構詞法，7頁；汉语，第三冊，123頁。

⁽⁸⁴⁾身関係をつたえる方法とみなされるようになった。もっともこのばあい、これがどんな方法で、その性質が何かを明確にはしていない。

動詞の前の「被」にかんする議論でいちばん広く行なわれているのは、中国の文献で常に形態構成のアフィクスとみなしている「了」、「过」、「着」のような補助詞とする見解である。

「被」がしばしばモルフェーム(字)ともいわれるのは、その語法的はたらきに注意しないで、単音節の性質からいっているからであり、このばあいは全体として受身の構造(被動式)をいっている。⁽⁸⁵⁾

「被」を前置詞とみなしうるか

すでにみたように、三項の文で「被」の後に動作の主体たる名詞がおかれるときは、通常「被」を前置詞的はたらきをするものとした。二項の文で「被」が動詞の前に直接おかれるときは前置詞とみなされない。

実際このばあいでは「被」を前置詞とみなすべきでないように思われる。なぜなら一般に理解するところでは、支配される体詞なしに前置詞を用いるのは本筋でないからである。しかし中国語では「給」、「替」のような若干の前置詞を動詞の前に直接用いることができる。たとえば、

刘四爷回来替问声好(老舍, 駱駝祥子, 66)

これは中国語がインドヨーロッパ語とちがっているところで、原則として前置詞を動詞に直接むすびつけてもよいということである。古代中国語において、こういうはたらきは標準的であった。したがって「被」を名詞なしで動詞の前に直接おくことができるということは、それを前置詞とみなすことに反対する根拠にはならない。

しかし問題は「被」の位置にあるのではなく、その語法的はたらきにある。それによって根本的に前置詞と区別されるのである。

(84) 張志公, 漢語語法常識, 新知識出版社, 上海, 1956, 87-97頁。

(85) 呂叔湘, 朱德熙, 語法修辭講話, 115頁。

上述のように「被」は、前置詞のばあい普通そうであるように、主としてその後につづく名詞を支配しないで、その前にある名詞を支配し主語のはたらきをする。「被」をおかねばならないのは、ほかでもなくこれらの名詞の主語のためであって、その後におかれる名詞のためではない。「被」は後につづく名詞と関係をもつにすぎず、そしてその後にくる単語たる動作の現実の主体をしめすだけである。

前置詞には本質としてこういうはたらきがない。したがって「被」は前置詞ではない。

「被」の主だったはたらきは動詞の語法的意味を形式的に表現するということである。つまり「被」は動詞に補足的意味をさずける。この点でも「被」は前置詞とはちがう。

そのほか「被」は発生上からも前置詞とはみなせない。歴史的に「被」は名詞とむすびついていた。つまり主語のはたらきをする容体とむすびつき、動詞の前に直接おかれた。

動作の主体をあらわす単語は「被」のある文の最初の発展段階では「動詞の後におかれた、というのはこのばあいそれは特殊な前置詞「於」によって導入されたからである。「被」と動詞の間に動作の主体となる単語が入るようになったのはずっと後（5—6世紀）のことであり、そのほか類推のためでもある。たとえば「史記」から例をとってみると、動作の主体となる「悪言」という単語の結合は「汙」という動詞の直接後にある。

湯为天子大臣被汙悪言而死（史記，酷吏列傳）

同じ「史記」から例をとると、次の文では趙という動作の主体をあらわす名詞が、動詞の後におかれる于という前置詞の助けをかりて入っている。

…以万乘之国被围于赵（史記，魯仲連傳）

王力教授は「被」と「于」が同時に用いられるようになったのは、動詞の前に直接おかれる「見」をともなう受動態構文の影響をうけたものとみて

いる。「漢の時代にはその機能上からいって多くの点で見と一致していた」⁽⁸⁶⁾。

周知のとおり、「見」のばあいは動作の主体をあらわす単語がいつでも動詞の後にあって「于」でみちびかれる。

吾常見笑于大方之家（庄子，秋水）

さらにもっと後代の作品「三国志演義」（8世紀）から例をとってみよう。

不意呂布竟被縛于二人（三国志演義，第四分冊，17頁）

これらの文中の「被」は前置詞とみなせない。

「被」の主なはたらきは、主語の後にあって客体の意味をたしかにし、動詞の語法関係を変え、動詞の補足的な語法的意味をあらわすことであるから、むろん動詞のなんらかの形式として「被」をみるべきである。

「被」を動詞のプレフィクスとみなしうるか

「被」は動詞の語法的意味の形態的しるしであるだけに、また語法的意味の形態的しるしと単語の形態の概念とは同一視されるのが常であるから、動詞の形態を構成する方法のひとつに「被」を入れられるかもしれない。そして動詞の前におかれることから、そのプレフィクスといえるかもしれない。

しかし「被」を動詞のプレフィクスに関係づけるためには、普遍化された語法的意味をつたえるというはたらきのひとつだけでは不十分である。「被」がプレフィクスとしてあるためには実質の意味が失なわれねばならないだろうし、またあらゆる種類の動詞を含まねばならない。

「被」にはわりと語彙の意味があるので、いろいろな見方が存する。

多くの研究者は「被」には実詞的な意味がないとみなしている。⁽⁸⁷⁾ 王力教

(86) 王力，漢語被动式的发展，語言学論丛，第一輯，上海，新知識出版社，1957，6頁。

(87) 劉世儒，被动式的起源，32，33頁。——劉世儒の考えによると、「被」は動詞の意味を失なってしまう、「虚詞的」な単語に変化した，六朝時代の言葉ではもう受動態を表わす方法になっている（六朝は229-589）。

授は「被」を補助詞の成分としているが、これは「虚詞」よりも実詞に近い⁽⁸⁸⁾となし、その前提として「被」の実詞的意味が動詞との結合に影響しているという。

高銘凱教授によると「被」は現代語でも動詞であり、実詞的意味は失なわれておらず、これは受動態の意味の形態的しるしにはならないと考えている(実詞的意味を保っていることに関係づけて⁽⁸⁹⁾)。後者の議論は根拠を失なっていない。

もしも「被」に実詞的意味があり、後につづく動詞とむすんで受動態の意味をつたえたとすれば、高銘凱の言葉のように記述的方法にすぎないかもしれない。明らかなことは、「被」が実詞的意味をもち、独立した単語でありながら、語法的意味をつたえる方法ではないことである。なぜなら「一定の概念をつたえる語彙的方法には、語法の特徴となる個別的なものや具体的なものからの抽象化や抽象性はない⁽⁹⁰⁾」からである。

もしも高銘凱のいうように「被」が「受ける」という実詞的意味をもっていることを認めるなら、「被」を動詞とみなさないわけにゆかないだろう。

しかし「被」は統辞論的にも形態論的にも動詞の特徴をもっていない。

周知のように「被」は独立した述語にはならないし、補語(名詞)をとらない。現代語には「被」が述語となる《主語—述語》の文も《主語—述語—補語》の型もない。「被」が用いられるためには、どうしても文中に他動詞がなければならない。「被」が用いられるのは他動詞とむすびついたときにかぎられる。

したがって「被」は動詞の統辞論的特徴をもたないということになる。

また「被」には動詞の形態論的特徴もない。被了他騙了という型の例

(88) 王力, 中国語法理論, 176頁。

(89) 高銘凱, 漢語語法論, 40頁。

(90) ヴェ・エヌ・ヤールツェワ, マール「理論」における語彙と語法の混同——
《言語学におけるマルクス主義の俗流化と曲解に反対する》第2巻, モスクワ,
1952, 364頁。

(この例の変体一被了他的騙了), 被了他的害⁽⁹¹⁾では一回完了体のサフィクス「了」がついている。⁽⁹²⁾このような例があるからこそ高銘凱は「被」の「動詞性」を証明しようとする。

「被」が文章語でなく口語に固有の多少とも固定化した単語の結合の成分になっているような文は単一であることから判断し, またこの種の単語の結合では「被」にかわって「受」という動詞がずっと多く用いられることを考慮にいれて, われわれはこのばあい同義語の動詞「受」があるものと考え。ここで「被」は実際のところ, おそらく現在用いられない古代の動詞「被」(現代の祖先)にさかのぼる動詞である。われわれの研究している「被」の同音異義語で, 一つ乃至二つの固定化した単語の結合のなかで見あたる動詞である。

そのうえ(以下でしめすが)「被」は二, 三の他動詞とともに用いられるのではなく, あらゆる他動詞とともに用いられる。この点で「被」は成語に入る語彙単位とは異なる。語彙単位は一定の意味をつたえるための叙述方法となるものである。

したがって「被」が完全に実体的意味をもち動詞であるとみなしてはならない。

王力教授は中国語では受動態文の使用が制限されていることにふれて, 「被」の語義にそういう制限の理由をみようとしている。「被」には「遭受」の意味がある。したがって受動型の文であらわされる動詞の動作は, 主語にたいする関係上不愉快か希望しないこと⁽⁹³⁾でなければならない。

一般的にいえば, 動詞の動作の「愉快」と「不愉快」によって動詞を区分すること自体が語法的区分ではない。同じ動作がいろいろな観点から, い

(91) J. Müllie, The structural principles of the Chinese language, v. II, Peiking, 1937, p. 45.

(92) 現代中国語には「被」が独立した動詞としてあらわれる例がある。
大家接着就預測他将被极刑(范爱农, 0064)

(93) 王力, 中国語法理論, 181頁; 呂淑湘, 朱德熙, 語法修辭講話, 117-121頁。

ろいろなコンテキストで「愉快」になったり「不愉快」になったりする。

「不愉快」の意味は動詞そのものにあるのではなく、一定のコンテキストで単語が結合するばあいのみあらわれるものである。

もし中国語の受動態文（「被」その他の補助詞をともなう）が実際多くのばあいに客体たる主語にとり「常に蒙る」、「不愉快な」特殊な語義の色彩をもつとすれば、この色彩は動詞の語義によるものではなく、文の構造全体、受動・被動の意味によるものである（ロシア語の術語《страдательный》—《страдание》（苦しみ）の語源と比較せよ）。したがって受動態文にある色彩があるということは、なにか不愉快なことをあらわす特殊な動詞グループとともに「被」を用いるのを制限するためとはいえない。

実際、「被」をともなう文で、その語彙内容が「被」の語彙内容と符合しない動詞が、しごく自由に用いられている。つまり、その動詞の動作が主語にたいする関係上なんら希望しなかったり不愉快だったりすることをあらわしていない。それは次のような他動詞である。

解放 jiěfàng	看見 kànjian
选举 xuǎnjǔ	知道 zhīdao
創造 chuàngzào	説明 shūoming

上の動詞は動詞の「不愉快」をあらわすばかりでなく、また反対にしばしば動作の「愉快」をあらわすにもかかわらず、「被」とともに用いることができる。

王力教授、呂叔湘教授と朱德熙は、「被」の使用にかんし昔の規準にくらべて現代中国語では著しい変化のあることをみとめ、それを外国語による影響と解釈している。⁽⁹⁴⁾

しかし外国語の影響をうけていない文学の古典作品に「被」が用いられていることは、「被」が「不愉快」とはなんの関係もない動詞とともに、と

(94) 王力, 漢語史稿, 435頁。

うから用いられていることを示している。⁽⁹⁵⁾

14世紀の「水滸」では「被」が次のような動詞と用いられている。

靠住 kào zhu	扯 chē
説开 shuō kai	引 yǐn
推开 tuī kai	留 liú
救 jiù	捲 juǎn
劝 quàn	吃 chī
吹 chuī	看見 kàn jian
拖出 tuō chu	轉 zhuǎn
差 chāi	把 bǎ など

「被」が14世紀の言語で、はやくも語法化された要素となっていることは明らかであり、単語のもとの意味からは抽象化されている。

これについてはもうひとつの作品「三国志演義」によってもいえることである。これは「水滸伝」よりも若干おくれて書かれたものである。これには次のような動詞が「被」とともに用いられている。⁽⁹⁶⁾

請 qǐng	扛 káng
猜破 cāi pò	围 wéi
躲 duǒ	

動詞の意味と「被」の意味の間に関係のないことは、18世紀の「紅樓夢」が証明している。語義上では「不愉快」となんら関係のない次の動詞を

(95) 呂叔湘, 被动式的起源, 32頁。

(96) 戦斗記事にみちている「三国志演義」では、主語となる人物あるいは事物との関係からみて「不愉快」とみなされる動作をあらわす動詞が非常に多く、それらは「被」とむすびついている。その動詞は、「殺す」、「負傷させる」、「捕える」、「しぼる」、「しめ殺す」、「射殺す」、「刺す」、「馬からひきずりおろす」などである。しかしこれらの動詞の大多数は「被」の語義によってではなく、全作品の文体、性質によって説明されることはまったく明らかである。

みてみよう。

看見 kànjian	剋制 kèzhì
挾 xiá	讓 ràng
扼住 èzhu	參 cān
賣 mai	知道 zhīdao

「不愉快」の色彩は「被」の語彙の意味とは関係なしといわねばならない。なおまた「被」のほかに話言葉では「給」、「讓」、「叫」の補助詞（これもまた受身の意味をつたえる方法となる）も用いることができるからである。これらは語法化されるまで「蒙る」の意味をもたなかった。

王力教授のみとめるように、古代語では「为」をともなう受身と「为…所」をともなう受身は、「被」のつく構造と同じく、なんら「不愉快」を表わさなかった。しかし「为」にも「为…所」にも「受ける」という語彙の意味はでてこ⁽⁹⁷⁾なかつた。

「被」を用いるばあい「不愉快」あるいは「不本意」を表わす動詞と結びつくとは限らないならば、そして「不愉快」の色彩自体が、事実上「被」の意味から独立しているならば、部分的にもせよ「被」に語彙の意味のあることをみとめる根拠はない。

「被」に語彙の意味があるといわれるのは、受身の文では「被」のほかに他の補助詞（讓、叫、給、为など）が用いられることに関連してのことかもしれない。これはちょっとみると前置詞との類似を思わせる。しかし前置詞は一定の現実的關係のみ、たとえばひとつの事物の他のものへの關係だけを意味するところに違いがある。前置詞は相互の入れかえがきかない。そのいずれもが異なった現実關係をあらわすからである。したがって互いに異なる前置詞の語彙の意味がいわれる。

現代中国語の受身の文で用いられる補助詞はどうかといえば、いずれも

(97) 王力, 汉语史稿, 435頁。

同じ現実の関係を意味している。したがって、この面での語彙の意味はすでにいけないわけである。中国語におけるこの補助詞の多様性そのものは各種の文体や各種の方言によるものである。たとえば「叫」と「給」は北京口語の土語に、「被」は文章語に用いられるのが普通である。評論、学問、芸術上の作品では圧倒的に「被」が用いられる。たとえば巴金の作品では多くのばあい「被」が用いられている(100頁のうち「被」が35回、「为」は3回、「給」と「叫」はない)。魯迅の作品ではほとんど「被」しか用いられていない。南方方言の受身では「被」が用いられ、山東では「着」が用いられる。

補助詞の多様性は中国語における受身自体の起源の異質性によるものである。⁽⁹⁹⁾それは各種の体の動詞とともにその作用に影響をあたえた。

これらの事実により、「被」は実詞の実体的意味の上でも前置詞のような補助詞の語彙的意味の上でも、語彙の意味をもたないといえる。したがって「被」にはプレフィクスのばあいと同じように、「ある種類の単語との結合、個別的な語彙内容の欠除と普遍的な語法概念の表現」が特徴となる。⁽¹⁰⁰⁾

これらの特徴は「被」にもプレフィクスにも共通のものである。しかし「被」ではプレフィクスとは異なった語根に多くの特徴がある。

「被」を屈折語型のプレフィクスとみなせないことは疑いもない。なぜならそれは単語の構造を変えないし、動詞なしに用いられるからである。「被」はそれとともに用いられる動詞にたいする関係上では、一定の独立性と統辞論上の独立をあらわしている。

単語としての「被」の統辞論的独立性と個別性は どこにあらわれるか

(98) たとえば、次の本を見よ。魯迅，故事新編，人民文学出版社，北京，1954。

(99) エヌ・エヌ・カロートコフ，歴史的シンタックス，145頁。

(100) ヴェ・エヌ・ヤルツェワ，「理論」における語彙と文法の混同，エヌ・ヤ・マラー，362頁。

「被」は動作の主体をあらわす名詞によって動詞と区別されるということのほか、単語としての「被」の個別性は次のばあいにもあらわれる。

a) 「被」は動詞と区別できる。「被」は各種の状語用法の副詞の助けをかりて動詞と結合する。そしてついには動作の主体たる名詞が取り去られているばあいには文全体とさえ結合する。たとえば、

四川方言有些字已被广泛使用(光明日報, 26. VI. 1950), (「被」は广泛という副詞によって動詞と区別されている)。

同時梅女士感得自己的手被用力地握着(虹, 187), (「被」は副詞の用力地によって動詞と区別されている)。

这ヶ计划正被极其顺利地完成着(「被」は顺利地という副詞で動詞と区別されているが、なおおまけに极其がついている)。

苏联的青年一代是被以无产阶级国际主义的精神和各国人民兄弟友爱的精神教育着(「被」と動詞の間に動作の方法の状況として以…精神が入っている)。

b) 「被」の後には二つ以上の動詞を同時におくこともできる。

据合衆社説, 那一次被打死打伤的战俘共有九人(「被」は打死と打傷の二つの動詞に同時に関連している)。

有一天傍晚, 一个学生在南門被三四个兵士围着痛打(巴金, 家, 53), (この文では「被」が围着と痛打に関連している)。

今天就被人家活生生捉住杀了…(赵树理, 李家莊的变迁), (このばあいは「被」が同時に二つの動詞に関連しており、しかも活生生という副詞で動詞と区別されている)。

もしもインド・ヨーロッパ語(屈折語)の材料で評価したり規準をもうける一般言語学の立場から「被」の性質にかんする問題を検討するならば、「被」は語形変化のプレフィクスとはみなせない。なぜならその根拠は「被」

が語形変化のアフィクスとはちがい、⁽¹⁰¹⁾他の単語や短語の方法で単語と区別できるし、また同時に二つの動詞と一緒に自由に用いられるからである。そのうえ「被」がこのようなプレフィクスに変化する傾向を語ることは妥当でない。⁽¹⁰²⁾

いろいろな時代の作品を分析してみると「被」はいつでも一定の独立性をもっていることがわかる。つまり、他の単語を用いることによって動詞と区別できることである。たとえば、「漢書」では「被」が副詞によって動詞と区別されている、なかんずく、この時代の漢語では大体において「被」と動詞の間に、動作の主体がおかれていなかった。たとえば、

身被重効（「被」は副詞の重によって区別されている）。

もしも現代中国語のある文章を現代語の規範となっている14世紀のある種の作品と比較するならば、14世紀では「被」が著しく統辞論的な独自性を持ち、現在ならば死んでいるか、あるいはほとんどお目にかからないような構文で至極自由に用いられていたことが明らかになる。

〔你〕…我不在家，恐怕被外人来欺负（水滸，第24回，274頁）。

林冲当夜醉倒…被衆庄客向前綁縛了，解送来一个庄院（水滸，第2回，125頁）。

この二つの例では「被」と動詞の間に文が挿入されている。その述語は自動詞で「来」（第一の文）と「向前」（第二の文）であり、したがって主文の主体「你」（第一の文）と「林冲」（第二の文）とはむすびつかない。⁽¹⁰³⁾

(101) この点にかんしゲェ・ワンドリエスの je にかんする意見はおもしろい。代名詞と動詞の間に一つ、またはそれ以上の語法成分 (je dis dis, je le dis, je ne le dis pas) をおけるということによつてのみ je B je dis をラテン語の語尾 o B dic-o (わたくしは話す) と同一視したり、je dis, tu dis, il dit を語根前の屈折をとともなう動詞の変化とみなしてはいけぬ。(ゲェ・ワンドリエス、言語、モスクワ、1937、89頁)。

(102) ア・ア・ドラグノフは「現代語では給と被という動詞を用いる傾向がある…態の意味をもつ動詞のプレフィクスのはたらきをするものとして」と書いている(ア・ア・ドラグノフ、現代中国語文法研究、127頁)。

(103) 許紹早、水滸中的被字句、東北師範大学、人文科学学报、長春、1956、21—34頁。

こういう構文はそれ以後の時代の作品にもある。

那老怪听得人哼轎子里伸出头来看时被行者跳到轎前，劈头一棍打了个窟窿（西游記，第二卷，34頁）。

現代語には「被」と動詞の間に文をはさめられるような例はほとんどない。

他还要说什么話却被另一个人跑来打岔了（巴金選集，239頁）。

これによって、現代中国語では「被」の独自性は失なわれているが、統辞論的自由はおおむね失っていないことがわかる。したがって「被」をよりきびしく使用する傾向はあるが、語形変化のプレフィクスに変化する傾向はないといわねばならない。

中国の言語学者の多くは「被」の単独性に根拠をおいて、「被」をプレフィクスとみなすことに反対している。

「ときおり「了」，「被」やこれに似たものがいわゆる語源からずっとはなれているばあいがある。たとえば，「他到北京了」，「他被我昨天碰見的那个人拉了去」。このばあい「了」は「到」のプレフィクスでもあるまいし，「被」は「拉」のプレフィクスではあるまい。ロシア語や英語ではサフィクスやプレフィクスが語源から分離されるだろうか。」⁽¹⁰⁴⁾

「被」がロシア語にも英語にもない統辞論的独立性をもっていることから、中国の言語学者たちは補助詞とよんでいるのが普通である。同じような方法でかれらは他の言語成分（もっともこれらの成分が形態的方法の附加成分をすべてもっているにしても）の研究に手をつけている。たとえば動詞の近くにある成分の「了」，「过」，「着」と名詞の近くにある「們」がそれである。

たとえば、動詞の近くにある成分は次の特質をもつものとみなされている。

1) 実詞にこれらを附加すると形態変化をおこす。これらの成分は単語

(104) 高名凱，再論漢語的詞類分別，中国語文，1954，8月号，16頁。

の形態構成にあずかりながら単語の補足的な語法的意味をあらわし、各種の単語ではなく同一の単語の各種の形態を構成する。

2) これらは強く発音されず、いわゆる軽声となる。

3) 語法的意味のほうが統辞論的なものよりもずっとつよい（しばしば後者のないばかりがある）。

4) これらの成分が役立つ単語にはっきりと見られる従属性が、これらの成分の固有の性質である（それなしにこれらは用いられない）。

5) これらの成分はあらゆるグループの単語——あらゆる動詞とともに用いられる。⁽¹⁰⁵⁾

補助詞が単語の補足的な語法的意味をつたえうること、また新語でなしに単語の新らしい形態をつくれることから、中国の学者のうち誰ひとりこの現象を「形態論」、あるいは中国の中国学でいわれているように「分析的形態論」ともよんでいないにもかかわらず、実質的には補助詞の形態論を論じている。

張寿康だけが率直に形態論を論じており、中国語の単語の形態変化（語形変化）は単語に補助詞を附加することによりおこると述べている。⁽¹⁰⁶⁾

高名凱教授の最近の著作には「分析的形態論」という術語がはじめてあらわれており、補助成分の「了」、「过」、「着」などに適用できる。⁽¹⁰⁷⁾

「被」を分析的形態の成分とみなしうるか

周知のとおり、「分析的形態」と「補助詞の形態」という術語は、概ねこのばあいには、あらゆる具体的言語の補助詞（前置詞、助詞、助動詞、後置詞など）を考慮に入れず、事実上補助詞から発生するそれらのうちの若干の

(105) 呂叔湘、孫德宣、助詞説略、36頁；張寿康、略論漢語構詞法；俞敏、形態変化和語法環境、中国語文、1954、No. 28、13-16頁；俞敏、漢語動詞的形態、語文學習、1954、No. 4、43-51頁。

(106) 張寿康、略論漢語構詞法、3-6頁。

(107) 高名凱、語法範疇、65頁。

みが単語の形態構成方法になること、またそれらが特殊な語彙の意味を欠いていることにより補助詞と区別されることを考慮に入れたばあいにはのみ同等にみてよい。補助詞を他の単語とむすびつけると後者の形式をつくる（こういう単語の形式は複合形式といわれ、形態構成のアフィクスによってつくられる単純形式と区別される）。単純形式は総合的であり、複合形式は分析的である。

「了」が動詞についたり「被」が動詞につくのは、複合の分析的形式と考えられるかもしれない。こういう結合は分析的形式の一連の特徴に符合する。たとえば、補助詞と分析的形式の実詞との結合は二つの単語の統辞論的結合とは違う、どう違うかといえば「分析的形式に補助成分を用いることは……語法的なものに依り……実詞の状況による……反対に補助詞を用いることは……自由な単語の結合では実詞の語彙的・文体的状況に依る……この差異は一定の語法条件をもつ実詞につく第一の型の補助的成分を用いる規則性（語法性）と第二の型の補助詞を用いる不規則性（語彙性）を決定する」⁽¹⁰⁸⁾。

なんらかの補助詞が分析的形態構成の要素かどうかを解明するさい、ふつうはそれとアフィクスを比較する。

次のばあい補助詞はアフィクスとともに形態構成の方法となる。

- a) もしそれがアフィクスのように個別的に用いられないばあい。
- b) もしそれが「他の言語成分と結合して全体を構成するばあいにはのみ、それ自身の意味を獲得する」⁽¹⁰⁹⁾ばあい。
- c) それが形態構成の方法として、その基本的（語彙的）意味をともなら単語の補足的な形態の意味を表わすばあい。

これは当然のことであるが、いずれの成分も形態構成のアフィクスが単語と合体しているにもかかわらず（これらのアフィクスを見つけ出すために

(108) エル・ゲ・ピオトロフスキイ、単語の分析形式再論（冠詞＋名詞）、——《ソ連科学アカデミー通報、文学言語部門》16巻、4冊、1957、347頁。

(109) ワンドリエス、言語、86頁。

は単語の構造分析が必要である), 補助詞が単語の外に存在することだけでも, 本質的に互いに異なっている。

このほか, 分析的形式の成分は次の点でアフィクスとは異なる。

a) 分析的形式は二つ, あるいは若干の成分からできあがっている。それによって補詞的な助詞は他の単語によってとって代られるという相対的な靈活性と能力をもつことになる。アフィクスについていえば, 根本から相互に移動したり分けられたり, あるいは他の単語によってとって代えられたりすることはできない。

b) 補助的な分析的形態では時折かつての語彙の意味を復活させることができる (たとえば冠詞は時として指示代名詞の意味をとることがある)。通常サフィクスはこの語彙性を完全に失なっており, それとともに実詞との結合も失なっている。⁽¹¹⁰⁾

ここに研究した中国語の成分は分析的成分とは著しく異なる。それらは他の単語で代替できないし, 「かつての語彙の意味」が復活されない。

それが分析形式の成分と異なる主な点は, 分析形式では補助詞があらゆる複合体の語法的な仕事をもたらすことである。こうして語法的意味と語彙的意味が分離する。補助詞のない基本単語のはたらきは名目的であって, 補助詞と結合してのみ統辞論のはたらきをする。

中国語では「了」や「被」のような成分が基本動詞の語法的はたらきのある部分をうけもつ。しかしそれがなくても基本動詞は統辞論の機能をはたすことができる。二十世紀はじめの中国学文献には, 学者, とりわけロシアの学者がしばしば西欧の言語との類推から「被」を助動詞とよんだことがみえる。⁽¹¹¹⁾

(110) エル・ゲ・ピオトロフスキイ, 単語の分析形式再論, 347 頁。

(111) エヌ・ヤ・ビチューリン, 中国語文法, 85, 86 頁; ペ・エス・ポポーフ, 中国語研究概論, 63 頁; ペ・ペ・シュミット, 官話文法試編, 333, 334 頁。王力教授も英語との類推からこれを助動詞とよんでいる (王力, 中国語法理論, 176 頁を見よ)。

こういう類推は正当でない。なぜなら西欧語では、受動態で形態的任務をはたすものは補助的成分の助動詞であって、基本動詞ではないからである。

中国語で形態的任務をもつものは、すべてその成分と結合した動詞自身であり、それらの成分は動詞の上に積みあげることができるし、あるいはそれがなくてもよい、しかし「被」は動詞のようにはいかない。基本動詞は変化するが、「被」はちっとも変わらない。

ロシア語では助動詞の《буду》が他の動詞の未来時の形態を構成しながら、それ自身に動詞のしるしがある。すなわち、基本動詞の語尾にではなく助動詞《буду》の語尾に人称範疇の意味があらわされる（たとえば、《Я буду читать》、《Ты будешь читать》、《Они будут читать》）。

英語では分析的形式の構成部分となる助動詞は、基本動詞に一つの形式があるままで、ともかく変化する。（I am sitting, You are sitting, he is sitting, he will be sitting 等、あるいは he is killed, he was killed, he will be killed.）

このようにして、ロシア語や英語のある一定の分析的に形態化された動詞の語法的特徴は助動詞の語法的特徴によって規定され、基本動詞は変化しない。中国語では基本動詞のみが変化して、複合体の語法的特徴は基本動詞の特徴によって規定される。

外国帝国主义势力已經被赶走了（「赶走」という基本動詞には完了をあらわすサフィクス「了」がついている）。

只有…这两个院子…沒有被他們烧过（趙樹理，小二黑結婚，125）（基本動詞の「烧」にはサフィクスの「过」がついている）。

我自己是被逼迫着作那些事情的（巴金，秋，71）（基本動詞の「逼迫」には持続をあらわすサフィクスの「着」がついている）。

以上のことから「被」を助動詞とみなすこともできないし、分析的形態の成分とみなすこともできない、つまり「被」を補助詞とみなすべきではな

い。

「被」を黏着のアフィクスとみなしうるか

呂叔湘と孫德宣は「了」、「过」、「着」などの成分に対する中国の学者の所論にかんする論文で最近の統辞論的独自性により、「それをアフィクスとみとめれば、アフィクスの規定そのものを⁽¹¹²⁾変えねばならない」と書いている。

しかしアフィクスの規定を変える必要はない。この独自性によりこれらの成分を屈折アフィクスとよぶことだけではできないが、黏着アフィクスの部類に入れることはかまわないからである。

もしも「了」、「过」、「着」の成分や「被」を黏着アフィクスの特徴という観点から考察するならば、黏着形態成分の特徴は「被」や「了」、「过」、「着」が特徴づけられるものと一致することが容易にわかるだろう。

黏着の概念規定にさいしては、次の点に注意しなければならない。

1. 語根—語幹と単語の性質を決める⁽¹¹³⁾特徴。語根—語幹の特徴は単語としての機能があり、同時に単語は語根—語幹としての機能をもつことである。⁽¹¹⁴⁾

2. 単語の形式的成分とよばれる性質をきめる特徴、これは a) 形式的成分が内容からも機能からも実詞に近いこと；⁽¹¹⁵⁾ b) 形式的成分の孤立性と完

(112) 呂叔湘, 孫德宣, 助詞説略, 33-39 頁。

(113) ア・ア・ホロドヴィチ, 日本の言語学の歴史から, 黏着の理論と日本語の親族関係の問題, —《ソ連科学アカデミー, 言語文学部門出版》, モスクワ, 1941, No. 1, 96 頁。

(114) 周知のとおり, これは中国語ではきわめて広くみられる。最近まで零形態をとる中国語では, 語根—語幹は単語と音韻的に一致するだけだという仮説があった。単語が語根—語幹と区別されるのは, 副詞(ゼロの附加成分)と補足的語法的意味によってである。(ヴェ・エム・ソーンツェフ, 中国語における単語と語根の問題, またヴェ・エム・ソーンツェフ, 現代中国語概論)。

(115) これもまた中国語の形式的成分に対して, 中国の言語学ではきわめてありふれたことである。

全な独立性； c) 形式的成分のきびしい分化（したがって黏着語における語形は単義であり，多義の屈折語とは異なる）。

3. 語根—語幹と単語の形式的成分との間の関係の性質をきめる特徴；

a) 単語の形式的成分と実質的成分との間の密接な結合にかけていること，（《実質と形式はほとんど常に外面的な方法によって相互に黏着する》）⁽¹¹⁶⁾； b) サフィクスのつく単語は，またサフィクスなしでも統辞論のはたらきをする。チェ・ジェーニはこれにつき書いている「インド・ヨーロッパ語の語根は孤立しては正式に存在しない，その（語根）はほとんど常にサフィクスまたは語尾（окончание, ending）を伴ない，あるいはこの二つの成分を伴なう。しかしトルコ語ではちがう，トルコ語ではあらゆる語根が孤立していて，サフィクスか語尾（окончание, ending）の助けをかりなくとも形態のはたらきをする…」⁽¹¹⁷⁾。

以上にあげた特徴はすべて黏着構造の語根—語幹と語尾（окончание, ending）の特性にかんし概念をあたえてくれる。

黏着語にかんする労作でみたように，黏着のアフィクスは一定の統辞論的個別性をもっている。この個別性は次の点にあらわれている。

1) アフィクスは単語と区別できるが，その語法的意味は独自の意味をもつ一連の単語によってあらわされる。

2) ひとつのアフィクスは個別的に各単語に一定の語法的意味をあたえる一連の同種の成分を同時に形態構成できる。こういうアフィクスは形式的にはこの種のグループの最後の単語に属する（《括弧の外におかれる》）⁽¹¹⁸⁾ようである。これは通常「グループ的」とよばれる。

(116) ア・ア・ホロドヴィチ，日本の言語学の歴史から，94頁。

(117) ア・カ・ボロフコフ，トルコ語族における黏着と屈折，——《アカデミー会員エリ・ヴェ・シチェルパー（1880-1944）を記念して》》，レーニングラード，1951。

(118) ア・ア・ホロドヴィチ，日本語の構造概説，博士論文（タイプライター），第一部，レーニングラード，1949，2-19頁；ア・エヌ・コノーノフ，トルコ語文法，モスクワ—レーニングラード，1941，204頁；イエ・ア・ボカレフ，アラビヤ語の統辞論，モスクワ—レーニングラード，1949。

日本語ではグループ的アフィクスが助詞によって各種の最後の名詞と区別されるが、これは注目すべきことである。このばあいグループ的アフィクスは助詞の後にくる。したがって最後の単語に直接関連するのではなく、たんに全体としてのグループに関連するだけである。

ポーランド語の黏着成分には特殊な個別性がある。たとえば人称語尾は動詞の形態から自由にはなれて、動詞の前にある他の品詞にひつつく (I takes my pracowaty do rana, mysmy to zrobili と比較せよ)⁽¹¹⁹⁾。

以上によって次の結論がでてくる。

a) 黏着語にはアフィクスが存在するが、それは一定の統辞論的個別性をもつ。

b) 同種の黏着アフィクスは語法的意味をつたえる方法となる。たとえば、特殊な範疇の意味 (格, 体, 時などの範疇) である。

同時に黏着アフィクスは、それらが語法的意義をあたえている語幹に対して自由であり、それとともに、また結合している。

黏着語にとっては語法形態の概念は語法形態にかんする伝統的観念とは異なる。しかし黏着形態が語法的意味をつたえられるということは一般にみとめられている。

以上によってみると、十中八九は「被」を黏着アフィクスとみなさねばならない。⁽¹²⁰⁾なぜならそれは黏着アフィクスの特徴となる統辞論的個別性と独立性をもっており (グループ的でありながら語幹にまでなり、単語の全グル

(119) イ・レコフ, スラヴ語における屈折構造からの離脱, ——《言語学の諸問題》, 1956, No. 2, 21 頁。

(120) 前世紀においてすでに黏着語には (現在では中国語でもそうだが) 黏着アフィクス (黏着の附加成分の分離性とむすびつけて) が語法的意味をつたえる方法になれるかという問題がおこされていた。

「黏着の附加成分に分割性のあること, また黏着語における単語の語彙構造は表面上統辞論的結合が似ていること, これは独立した単語によって語法的意味をあらわすための方法としてか, あるいは一般的にいて単語の語法的形態が欠除しているものとしてさえ, 若干の研究者には理解され解釈されていた」(エス・エム・シチェルパーク, トルコ語における語法的意味の表現方法, ——《言語学の諸問題》, 1957, No. 1, 19 頁。

ープを構成する), またその語法的役割は用いられている単語の範疇的意味をつたえることにあるからである。(しかし「被」のない動詞は、黏着語の動詞とおなじように統辞論的機能をはたす)。

この点で次のエヌ・イ・コンラッドによる資料, 「被」は受動態の分離されたプレフィクスである⁽¹²¹⁾(黏着語の型のプレフィクスを考えている), という「被」の規定は注目に値する。

コロートコフはずっと前にこの考えを導き入れている。もっともかれは「被」を受動態のプレフィクスとして率直に到る所で語っているわけではなく、むしろ受動態の附加成分とよび、第一にそれを形態的方法に関係づけ、第二にはその黏着的性質を指摘している⁽¹²²⁾のである。

類推の方法で(サフィクスの)成分「了」, 「过」, 「着」にも同じ資格をあたえうる(これらはまた統辞論的独自性と個別性をもち、これらについていない動詞も統辞論的機能がある)。わが国の中国学ではこれらの成分を往々にして黏着アフィクスとよんでいる⁽¹²³⁾。しかし、これはすべていまのところでは慎重に考慮すべきである。「了」, 「过」, 「着」などの型の成分(これらは本論では特に研究しない)との関係においてのみならず、「被」との関係においてもそうである。むしろ、「被」を一定の形態的方法の範疇に帰属させることは、それが動作の主体をあらわす名詞とも結合していることによって困難になる。

同時に他の単語—他の品詞と結合している(たとえ間接的にせよ)このような単語の形式的成分、これは一般的に⁽¹²⁴⁾いって可能であろうか。

(121) エヌ・イ・コンラッド, 中国語について, ——《言語学の諸問題》, 1952, No. 3, 77頁。

(122) エヌ・エヌ・コロートコフ, 中国語における文の発展段階と動詞区分の方法, 博士候補論文, (タイプライター), モスクワ, 1946, 151頁。

(123) 同上; イ・アシャーニン, 中国語教科書, 第一巻, モスクワ, 1946, 14頁。

(124) 中国語でこういう現象は原則として可能である、とくに語法的に後の名詞とむすびついている単一性のアフィクスのばあいみられる。しかし前の単語の構成部分となる(ヴェ・エム・ソーンツェワ, 現代中国語概論, 100, 101頁)。

このほかまた、文のひとつの型の範囲内で「被の機能だけをしらべるとなると、その性質を規定できない。他の型の文中における「被」の使用条件を考察する必要がある。

非限定主語をともなう文における「被」

非限定主語の文にあっては一定構造の文が考えられる。多くのばあい、その文頭には、場所の意味をもつ前置詞—後置詞構造か、あるいは状語が置かれ、それから動詞、その後名詞がくる。

述語となる動詞の性質上、また動詞の後の体詞の意味により、この種の文は二つに分けられる。

第一の型の文では動作をおこすものを示す単語、あるいは単語の結合が最後におかれ、その動詞は通常は自動詞である。たとえば、

我們后头走着个姓白的伙計。

第二の型の文では動作をうける物を示す単語が最後におかれ、動詞のほうはふつう他動詞とみなされる。たとえば、

上面还点着个紅点儿。

非限定主語をともなう文は、文の成分によって次の形に分けられる。その最初の単語は一連の研究家により場所の状語、第二の単語(動詞)は述語、名詞はこのような文ではなにか限定されない主語とみなされている。したがってこれを非限定(不定—indeterminate subject)とよぶ。⁽¹²⁵⁾

同じ文を他の原則で分解する仕方もある。つまり、文のはじめにある状語は主語、その後にくる動詞は述語、その後につづく名詞を補語とみなすのがそれである。⁽¹²⁶⁾

(125) J. Müllie, The structural principles of the Chinese language, v. 1, Peiping, p. 162, 163; ア・ア・ドラグノフ, 中国語の文の附属成分, 5冊, 6分冊, —《ソ連科学アカデミー通報, 文学言語部門》, 484-490頁; エヌ・エヌ・カロートコフ, 歴史的統辞論, 313頁。

(126) 中国語文, 1952, 11月号。

われわれの見るところでは、非限定主語をとる二つの文型では、第一の成分は状語、後の名詞は主語である。

このような文は構造上からも総括的意味からいっても同種のものである。これらのものは「ある一定の空間場所で行なわれる動作や状態が任意の事物には、本来備わっていること」を伝えるのが使命である。⁽¹²⁷⁾

第二型の非限定主語の文では「被」を入れることができる。たとえば、
在南站一次就被炸死了几百个老百姓（謝挺宇，霧夜紫灯，作家出版社，205）

この文の終りには動作の客体がおかれていて、他動詞に支配されている。他動詞の前には「被」がおかれ、全文は前置詞—後置詞構造の「在南站」で始まっている。こういう文では「被」の後に動作の主体となる名詞を入れることができる。

周知のとおり非限定主語をとる文では、「被」のつく文でも可能な場所の状語をとりさることができる。たとえば、

不知道是他的脚登空了，还是被一块石头絆住了脚，我們猛然跌倒了（魏魏，誰是最可愛的人，人民文学出版社，9）

我看着就像被他們一刀一刀地割着我自己的肉（田汉，劇作選，人民文学出版社，91）

この種の例は現代中国語では偶然の現象ではないし、中世中国語にもある。

那里又被火烧了大軍草料場（水滸，11回，130頁）

被你杀了四个猛虎（水滸，44回，517頁）

黄安把船尽力搖过蘆葦岸边却被两边小港里鑽出四五十隻小船来（水滸，20回，233頁）

これらの文では他動詞の存在が「被」を用いるための必須の要件となっている。しかし「被」はこのばあいどんな役割をしているのか。

(127) エヌ・ヴェ・コロートコフ，中国語の動詞文の主語規定の規準，40頁。

上述のように《主語—被—補語—述語》構造の動詞文における「被」の基本的はたらきは、主語のため客体の意味を確実にすることにある。ここでも「被」はこのはたらきをしているのか。

次の数々の理由により同じような「被」の機能はみとめられない。

第一に、他動詞のある文では「被」がなくても動詞の後にくる名詞の客体的意味は明らかなように思われる。たとえば、「被」のつく文「牆上被挖了一个洞」に似ているものに「被」のない第二の型の非限定主語の文「牆上挖了一个洞」がある。

動詞の後の体詞の客体的意味は「被」のあるばあいとないばあいの二つの文にあらわれるようである。

こういう一対の文があるということは、「被」をおくことができ、またおくことができない同じ文型の文を使用できないかという疑問をおこさせる。したがって、この種の文中での「被」使用は随意であるということになる。⁽¹²⁸⁾

ここで相異なる二つの型の文がありうるとみとめられる。つまり「被」の用いられる非限定主語のある文と、「被」の用いられない非限定主語のある文である。

このほか、上述の二つの型の文の差異は「被」をともなう二項の動詞文と状態文との差異と同じであると推測できる。

状態文にとっては主語の性質(主体かあるいは客体か)は区別できない。二項の受動態文では主語の客体性は明らかであり、それ以外ではありえない。主語の客体的意味は「被」があることにより形式的に確実となる。

第二の型の非限定主語をともなう文においても、主語となっている体詞の性質は区別できない。つまり、こういう文の主語のはたらきを同じようにしているのが主体をあらわす名詞でもあり、また客体をあらわす名詞でも

(128) 「被」の任意性については本書、47-54頁を見よ。

(129)
ある。

「被」のつく文では後にくる体詞の客体性は、「被」の助けにより確実にされ、区別されていることにより明らかである。したがって「被」のつく文は第二の型の文とは違って、しかも能動・受動の面で、それと対置されていない非限定主語をともなう文の特殊な型と考えることができる（二項の状態文が「被」をともなう二項の受動態文と対置されないように）。

「被」の用いられている非限定主語の文は、「非限定主語をもつ受動態文」とよぶことができるかもしれない。

第二の型の非限定主語をもつ文と、いま問題にしている受動態文との差異は次の点に、すなわち受動文では「被」のない文にとって、本質的でない動詞の客体関係があらわされていることにある。

このほか「被」のつく文では語法的に主体関係もあらわされる、つまり何処かで何かが発生したことが確認されるのみならず、誰かの動作の結果、何かが起こったことも強調されている（動作の存在の事実というよりは、むしろその完成過程を指している）。このばあい「被」はどうしても必要であり、したがってその使用の任意性はみとめられない。

それゆえ「被」はこのばあい主語の後の客体的意味を語法的に確実にするというふつうのはたらきをしているものとみとめることができる。

このような文に「被」がどうしてもいるということは、なお次の諸点によって説明されるだろう。

非限定主語をもつ文では基本的に自動詞が用いられることは周知のとおりである。第二の型の文で用いられる他動詞は、多くは自足的用法（補語のない用法）になっている。

多くのひとが、これらの文中の他動詞は通常は持続のサフィクス「着」がつくといっているのも偶然ではない、このばあい「着」は他動詞の性質を

(129) 同じ他動詞でもある名詞は動作の客体となり、ある名詞は動作の主体となる。外头升起来了红旗。東方升起一轮红日。

自動詞の性質にかえて⁽¹³⁰⁾いるようにみえる。

他動詞に「被」がつくばあい、「被」は動詞の及物性をなくす、つまり同じように他動詞から及物性を「うばいとる」⁽¹³¹⁾態の形式に用いられる。

しかしこれはすべて仮説にすぎない。われわれにはまだ、一般的に非限定主語をもつ文についても、「被」が用いられている非限定主語をもつ文についても、充分で完全な知識がない。したがって、文中における「被」の役割にかんして最終的断定をくだすことができないでいる。

いまにいたるもなお、ここで分析している文で動詞の後にくる体詞が主語であることは証明されていない。

中国学では非限定主語をもつ受動態文も解釈はまちまちである。基本的にはこの文のはじめに状語あるいは場所をあらわす状況のフレーズのないばあい論議がおこなわれている。たとえば、

被你杀了四个猛虎（水滸，第44回，517頁）

ミューリはこれを受動態文とみなし、許紹早は主体たる主語の前に「被」⁽¹³²⁾がおかれ、動詞の後に補語がある普通の能動態文の「主語—述語—補語」の型とみなしている。⁽¹³³⁾

被你杀了四个猛虎という型の文は、表面上はほんとうに能動態文のようである、動詞の後におかれた名詞は意味の性質からも（客体）、文における位置からも（他動詞の後にある）直接補語のようである。

これらの文が能動態文であるという理由として「把」を文中に入れられるという事実（「把」は直接賓語の附加成分とみなされる）、しかもこの補助詞によって客体を述語の後から述語の前に移せることを確かにあげられるだろう。

(130) 中国語教科書，242頁；エス・イエ・ヤホントフ，中国語の動詞範疇，441-450頁。

(131) ア・エム・ペシコフスキイ，科学的に解明したロシア語シンタックス，119。

(132) J. Müllie, The structural principles of the Chinese language, v. II, § 185.

(133) 許紹早，水滸傳的被字句，21-34頁。

被你把四个猛虎杀了（この文では前置詞「把」に支配される「四个猛虎」という客体は動詞の前にある）；

最可笑的是白茹，被姑娘們差一点把她吃掉（林海雪原，339）

說是被河里上来的淹死鬼把魂吓丢了（馬烽，50）

忽然被覺慧底声音把他攪扰了（巴金，家，318）

「把」を用いて客体の位置をかえられるということは、この客体が補語でなければならないことを証明しているかのようである。なぜなら「把」は直接補語の附加成分であって主語の附加成分ではないとみなされているからである。しかしこれも疑義がないわけではない、というのは「把」が中国語では文の一定の成分の（直接補語の）附加成分であることが証明されているとはまだみなせないからである。

「把」は直接賓語の附加成分でありながら、文の一定の成分とむすびつかないでいることもできる。たとえば、東干語では能動態文の補語に「把」を用いる事実がみとめられるし、受動態文の主語にも同じ事実がみえる。⁽¹³⁴⁾

中国語の「把」が文の一定の成分とむすびつかないということはエヌ・ゲ・ラニンスカヤの「把」の研究にみえる。⁽¹³⁵⁾

したがってミューリも「把」の性質を次のようにみている。「把」は限定された対格 (determinate accusative) の附加成分であって、文の成分の附加成分ではない。この点でとくに注意をひくのはミューリがおこなった上述の型の文の分析である。

被你把四个猛虎杀了という型の文で、かれは「把四个猛虎」を受動の主語、「被你」を補語としている。

ミューリは同様に被你杀了四个猛虎という型の文も受動となし、これを次のように考察している。主体の「被你」は補語、動詞「杀了」は述語、

(134) ア・ア・ドラグノフ，東干語文法の研究。東干語文法の研究。東干語（甘肅方言）の体と時の範疇，モスクワ—レーニングラード，1940，56頁。

(135) エヌ・ゲ・ラニンスカヤ，現代中国語における「把」をともなう直接賓語の倒置，博士候補論文（タイプライター），モスクワ，1953，129頁。

客体「四个猛虎」は受動の主語で文の終りにおかれている（公式は「補語—⁽¹³⁶⁾述語—主語」）。

許紹早は異なった見方をしており、この型の文の公式を「主語—述語—補語」として、主体「被你」を主語、客体「四个猛虎」を補語とみなしている。⁽¹³⁷⁾

これらの文の主体と客体をしめす単語のはたらきが各種に解釈されているということは、文の成分（主語や補語）を区別する正確な標準がないということ、それは以上の文ばかりでなく一般的にいて中国語そのものについていえることである。ミューリはひとつの標準から出発し、許紹早は他の標準から出発している。ミューリにとって中国語の主語は動かすことのできる範疇であるが、一定の範囲内で移動し、きびしく規定された位置にあることができる。許紹早にとって主語は動かさないもので、それは文の始めにだけしかおかれない。

たとえば、これらの文で「被」（同じく「把」についても）のはたらきを解くことは、その中の文の成分を規定する規準がないため困難となる。ここではまだ単語の位置（位置の規準）のはたらきも、補助詞のはたらきもはっきりしない。

ふつうの文では補助詞が文の成分を明らかにするための補助手段となる。このばあい「被」と「把」の語法的是たらき自体は未知数である。

もしも「被你杀了四个猛虎」で動詞の後の体詞（客体「四个猛虎」）が主語であるとすれば、「被」は主語のために客体の意味を確実にするものと認められよう。

もしも動詞の後の体詞「四个猛虎」を補語、主体「被你」は主語であるとすれば、「被」は主体の体詞を支配する前置詞とみなさねばならない。⁽¹³⁸⁾

(136) J. Müllie, *The structural principles of the Chinese language*, v. II, § 186.

(137) 許紹早, 水滸傳的被字句, 21-34 頁。

(138) 許紹早, 水滸傳的被字句, 21-34 頁。

わが国の中国学では「被你杀了四个猛虎」という型の文は主動的構造(Эргативная конструкция) (訳注)とみなされたこともあった。この見解は1946年から1947年までモスクワ東洋学研究所における中国語講座でイ・エム・アシャーニンにより講義されたことがある。

周知のとおり主動構造は「主動構造の基本的楨榫となる他動詞の特性により決定される主体と客体の格の特性によって特徴づけられている」⁽¹³⁹⁾。

主動構造のばあい他動詞の特性が決定的だということと関連して、「体詞が格によって変化しないばあいにも主動構造を語ることができる……」⁽¹⁴⁰⁾。したがって中国語の主動構造を問題にするのも正しい。

主動構造で客体をあらわす単語は主格の形をとり、主体をあらわす単語は行為者をあらわす主動格の形をとる。

しかし主動理論は中国語の文の構造を規定するにも、また文中のどんな単語が主語となり、「被」がどんなはたらきをするかを規定するにも役にはたさない。

主動構造の理論には主体と客体の語法的はたらきにかんし各種の説明がある。

ある見解によると客体は主語であり(なぜならそれは主格であるから)、主体は直接賓語とみなされる(なぜならそれは主動格だから)。

もうひとつの見解によると、たとえそれが主動格であるにしても主体が主語である⁽¹⁴¹⁾。

上述のように「被你杀了四个猛虎」という型の文にたいしては(主動構造にたいしても)二つの見方がある。つまり主体あるいは客体が主語になることである。

(訳注) 他動詞と自動詞の主語が各種の格であらわされる構文。コーカサス、バスク、古アジャ、アメリカ、インドその他の言語にみあたる。

(139) ア・エス・チコバーワ、主動構造にかんする若干の意見、——「主動構造」、イェ・ア・ボカレフ編、モスクワ；1950、6頁。

(140) 同上。

(141) 同上。

「被」の語法的はたらきを説明するために、この二つの原則的に異なった解決法が何の役にたつか。

もしも「被+主体」が主語だとすれば、「被」は主語のグループにふくまれていると思われる。これはつまり「被」がこのばあいには主語のはたらきをする体詞になっているだけだということである。そのとおりだと認めよう。しかしその時には、そのために「その性質上受動態の動詞と意味が同じであるという動詞の特性」が⁽¹⁴²⁾つくられる。ここで主動構造を特にとりあげてもよいような特性はどこにあるのか。こういうふうに文を分析すると、この問題にこたえることができない。

もし客体が主語ならば、「被」は主体ばかりでなく動詞も支配する。

このばあい客体のため主語のはたらきを確実にするものとして「被」の語法的はたらきを説明することに賛成できるかもしれない（なぜなら「被」は主体の主語のはたらきをうばい去るからである）。

このように文を考察すると、この構文の動詞が受動態の動詞とみなされるような動詞の特性を語ることができそうである（なぜならそれは客体とおなじく主語とも相関連するから）。

しかしここで大事なことは、中国語の主動構造が特殊な型の文ではないことである、というのはこれはふつうの動詞文でもつくれるからである。これと関連して、中国語には独自の主動構造が存在するといってはならないだろう。

「被你杀了四个猛虎」という文が「四个猛虎被你杀了」の倒置構造であることは、ちょうど「四个猛虎你杀了」が「你杀了四个猛虎」の倒置構造であるのと同じである。

第一組、第二組の文で客体の位置はそれぞれ違うが、その他の成分はすべて本来の位置そのまま変わらない。したがって客体の位置が何によって

(142) ア・エス・チコバーワ、主動構造にかんする若干の意見、——「主動構造」、
イェ・ア・ボヤレフ編、モスクワ、1950、7頁。

変わるかを説明しなければならない。

もしこの仕事が各種の意見を表わさねばならぬとすれば、第一の文の末尾にある客体の語法機能は（第二の文の）「被」の前にある客体の語法機能と同じでなければならぬのは自明のことである。

しかしあるいは客体の位置変更が客体の機能的関連性に影響をあたえる語法的要因によりおこるのかもしれない。

それを決定するには専門の研究を必要とするし、それなしには客体のはたらきの問題を決定できないし、したがってまた「被」のはたらきの問題にも結論をだすことはできない。

主題文における「被」

いわゆる主題文は非限定主語の文に非常に近い。いまのところまだ解決されていない多くの問題も、これと関連がある。

われわれは非限定主語をもつ受動態文を問題にした時、それが一定の構造（場所の状語＋被＋動詞＋体詞）にしたがって構成されていることをみた。

もしこの文で場所の状語の代りに体詞がくると、主題文となる。たとえば、

徐錫麟是被挖了心（魯迅，64）

主題文では述語が文の大きな成分である。つまり全文によって表わされる。主語（主題とよばれる）は全体的なものを意味するが、それは成分述語の主語となるある部分をとおして特徴づけられる。この文には三つの体がある。

a) 成分述語の述語は形容詞で、その文の構造は「名詞＋名詞＋形容詞」である。たとえば、

你胆小。

b) 成分述語の述語が自動詞で、その文の構造は「名詞＋名詞＋動詞」

である。たとえば、

我頭疼。

c) 成分述語の述語が自動詞で、その全文の構造が「名詞＋動詞＋名詞」である。たとえば、

他落頭髮。

他那手破了皮了。

c) 体の文では動詞が他動詞であるかもしれない。しかしこのばあい、それはいつでも自動詞の意味をとる。これについてはミューリがすでに指摘している。⁽¹⁴³⁾ 他動詞をこのように用いられるということは、文全体の構造と関係がある。まず第一に主題の主語になっている名詞は決してその後にくる動詞の動作の主体となっているのではないということに関係がある。

主題主語となる名詞は他動詞も入っている後にくる全体としか関係をもたない。他動詞の後におかれる名詞は、成分述語の主語とみなされる。

他動詞をもつ主題文には「被」の入ることがある（単独で、あるいは動作の主体たる名詞とともに）。

主題文：

我眯了眼了

「被」をともなる主題文：

这些日子里（我）被爱情迷了眼睛。

主題文と「被」をともなる文の構造は同じで、「体詞＋他動詞＋体詞」である。

「被」をともなる文は、最初の体詞が主題主語で、その後続くものが成分述語となっている主題文とみなしうるだろうか。このばあい「被」は成分述語と結合しているのか（つまりその構成部分になっているだけか）、それとも主題主語と結合しているのか。

もし「被」が主題主語と結合していると考えれば、主題文について

(143) J. Müllie, The structural principles of the Chinese language, v. II, § 186.

語れないことは明らかである（なぜなら「被」は他動詞とともに主語になっている体詞と直接むすびついているから）。

もし「被」が成分述語の構成部分になっているとすれば、それは文の終りにおかれる名詞（客体）と結合するのか、そしてまた「被」は動詞の後の体詞のために客体としての意味を確かにするのかの決定を迫られる。

動詞の後の体詞がどこでも文の独立した成分にならないことは、言語の資料がそれを証明している。「被」の後に安定した単語の結合（「動詞＋客体」）で表わされた述語のくることがある。

大家被激起了好奇心（第一階段的故事，207）

そのうえ動詞の後の体詞はどこでも他動詞が影響を及ぼす客体を意味するのではない。たとえば次の例で「酒」は動作の道具の意味をあらわす。

每个人都被罰过酒不过其中被罰次数最多的是枚少爷和淑貞（巴金，秋，64）

動詞の後の体詞は、主題主語となる物の動作によって数量範囲をあらわせることが非常に多い。こういう客体は常に数詞が計量単位の名詞（広い意味での）と結合したものである。

然而他底心已經被你分去了一半（巴金，秋，180）

我們新工也被开除了五六十人了（田汉，劇作选，253）

これらの文で最後にくる体詞を類推により動作の客体の意味をもつ動詞の後にくる体詞とみることはできない。

これは基本的には、文の構造にたいして同じ方法はとれないというこ
(144) と、したがって、すべてこの型の文における「被」のはたらきをみるばあい

(144) 客体が主語におかれている物の動作によってとらえられる数量範囲を表わす文は、補助詞「把」を伴って主語におかれたこの物を用いるという点で他の文と著しく異なる（このばあい「被」はむしろ省かれる）。これは興味あることだ。

屋脊被打落了一角（巴金，家，152）

一个炮弹把牆打落了一角（巴金，家，152）。こういう一組の文があるということにより、「被」をとともなうものを主題文としてでなく、「主語—被—述語—補語」公式による構造のふつうの動詞文として解剖すべきである（ここでは動詞の後にある体詞は数量補語である）。

にも唯一の方法はとれないということである。

しかし実際は主題文も上述のモデルどおりにつくられることを認めねばならない。それにたいしどんなばあいでも同じ方法をとれないことはいうまでもない。

動詞の後にくる体詞が他動詞の影響をうける客体となる「被」をともなう文にかんしていえば、それは本来主題文に近い。この文中の「被」は成分述語における動詞の後にくる主語のため客体の意味を確実にするというふうの機能を果している。

誰にも明らかのように、主題文と非限定主語をもつ文の本質と本性にかんする問題には多くの未解決な問題が関連しており、その解決は大きな研究題目となっている。したがって、こういう文における「被」のはたらきにかんしては、特定の文しか述べられていない。

疑いもなく次の点は同じである。非限定主語をもつ文でも主題主語をもつ文でも、これらすべての型の文では「被」は前置詞ではない。つまり第一に「被」は主体とともにも、またそれなしでも機能をはたす。第二に上述のすべての文では何かが起ったということが確認されているだけでなく、「被」のおかげである動作の結果ある事が起きたことが強調されている(すなわち、こういう文では、動作が存在するという事実よりは動作の過程のほうがはっきりとあらわれている)。

以上の各種の構造の文の分析では、まだ文中における「被」の語法的はたらきを充分論証的に規定できないながらも、「主語—被—補語—述語」の公式の動詞文の研究のできた資料はくつがえされないということはきわめて重要である。(なぜならここでも多くのばあい、主語のため客体の意味を確実にするはたらきをする「被」を説明するにたる根拠があるからである)。

む す び

「被」は動詞の補足的な語法意味をつたえる方法であり、動詞の特殊な

語法範疇つまり態の範疇をつくる方法である。

「被」の性質のこういう規定は、中国語のあらゆる成分との対比によってのみ出てくる結論である。

もし「被」にたいし屈折語の態と、その附加成分に提起された評定と規準を採用すれば、「被」にはその評定があわないことがわかる。とくに「被」は二重性をもっている。つまりそれは動詞の受身の意味と同時に、動作の主体をあらわす名詞との関係上前置詞の機能に似たものをあらわしている。

したがって中国語の態の範疇はきわめて特殊であり、インド・ヨーロッパ語を標準として対してはいけない。

この範疇の本質的特徴——動詞の補足的意味（被動の）と主体・客体関係の規定を表わす——により、いま研究中の現象を特殊な語法範疇とよんでよいし、言語学に通用する名称を「被」のためにのこすことができる。

しかしそれと同時に、この範疇は独特なものである。すなわち「被」をともなうあらゆる文に（中国語における語序の語法的役割とむすびついた構造的要因から）能動態文が相応するのではない（「被」をともなう文のすべてを能動態文にはかえられない）。

明らかに、「被」は厳密にどうしても要するという範疇ではない（それを用いることにより、いつでも説明が得られるとはいっても）。厳密にどうしても要する範疇（「被」をぜひ用いること）に欠けているということは、とくに「被」をともなう文に非常に近い文があるということによって説明される。たとえば状態文がそれで、これには「被」が用いられず、主語のはたらきをするものは動作の客体となる名詞である。多くのばあい「被」がなくてもよいこと、また使用の任意性はこれと関連がある。

受動態の特殊な範疇とそれを形態的にあらわす「被」は自ら獲得した範疇である。中国語では動詞の概念がそれに基礎をおいているのではないし、それがもっと普遍的な範疇として動詞を規定しているのではない。特殊な範疇は動詞のでき上った普遍的範疇の上に積みかさねられている。

ヨーロッパの言語では動詞の概念が特殊な範疇のそとでは考えられず、その上に基礎をおいている。ところが中国語では動詞の形成された範疇の上に積みかさねられた「被」と同様にあらゆる形態要素が用いられる。したがって中国語の特殊な語法範疇の特徴がでてくる。

態関係面におけるこの特徴は「被」のない動詞、つまり「0+動詞」がただ「被+動詞」の形式に対立している程度によってのみ能動態の形式をとるという点にあらわれている。「被+動詞」の形式が「0+動詞」の形式に対立しているのは絶対的ではなく、相対的であり部分的である。「0+動詞」の形式は「被」をとともなら形式があらわれるまでは、「能動」と「受動」の意味に用いられていた。「被」をとともなら形式の出現は「0+動詞」型の「絶対的」意味のうちに受動の意味と対立する能動態の意味を分断している。しかし、ある一定条件においては、いまなお動詞のゼロ形態（「被」なし）を「受動的」に用いることができる。基本的に「被」なしで動詞を「受動的に」用いる範囲は状態文である。

上述のゼロ形態と形態的しるしのついた言葉の関係は、体にかんしてもその他の面についてでもみられる。この点に中国語の形態論がインド・ヨーロッパ語の形態論と異なる特殊性のひとつがある。

例文引用文献

- 巴金選集，开明書店，北京，1952。
巴金短篇小説集，第一集，开明書店，上海，1939。
巴金，秋，人民文学出版社，北京，1955。
王还，“把”字句和“被”字句，新知識，上海，1958。
魏魏，誰是最可愛的人，人民文学出版社，北京，1951。
茅盾，第一阶段的故事，文光書店，上海，1949。
丁玲選集，开明書店，北京，1951。
老舍，月牙集，晨光出版公司出版，上海，1953。
老舍，駱駝祥子，人民文学出版社，北京，1956。
曲波，林海雪原，作家出版社，北京，1958。

- 魯迅，彷徨，人民文学出版社，北京，1956。
- 魯迅，野草，中国文学研究社。
- 魯迅，小說集，人民文学出版社，北京，1954。
- 馬烽，宝洁蘆，北京，1952。
- 茅盾，子夜，人民文学出版社，北京，1954。
- 茅盾，虹，开明書店，上海，1949。
- 三国志演義，上海，广益書局。
- 苏联青年代表团在中国，青年出版社，北京，1950。
- 中华人民共和国对外关系文件集，第一集，北京，1958。
- 西遊記，繡像仿宋完整本。
- 叶聖陶，童話選，中国少年儿童出版社，北京，1956。
- 田汉，劇作選，人民文学出版社，北京，1955。
- 謝挺宇，霧夜紫灯，作家出版社，北京，1958。
- 巴金，霧雨电，
- 魯迅，朝花夕拾，范爱农，人民文学出版社，北京，1956。
- 曹雪芹，紅樓夢，作家出版社，北京，1953。
- 全图增評金玉像
- 趙樹理，三里灣，人民文学出版社，北京，1958。
- 趙樹理，李有才板話，新华書店，1949。
- 趙樹理，小二黑結婚，1949。
- 趙樹理，李家庄的变迁，新华書店，1949。
- 周立波，鉄水奔流，作家出版社，北京，1955。
- 周立波，暴風驟雨，人民文学出版社，北京，1952。
- 施耐菴，水滸傳，作家出版社，北京，1953。
- 評註水滸全傳，掃叶出房业行，上下。
- 儿女英雄傳，新文化書社。